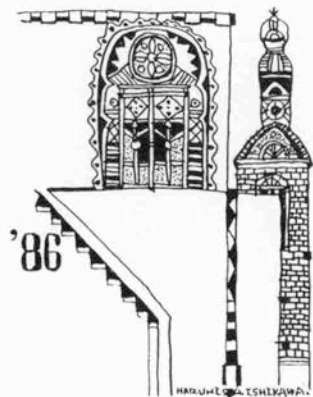


随想



カット/石川 晴久

だが、神戸にはもっと目を輝かすに値する所がたくさんある。

それは、きれいに整備された、着飾った所ではなく、ちょっと裏路地をくぐれば「あっ」と言わせる風景、建物があり、また、角を曲れば外国の街角を思わせる建物が連なっているというように。

神戸の街、いや、どこの街でもそうであると思うが、神戸はそのまま神戸であり、決してつくりものの神戸になってほしくない。もしそうなれば何の魅力も持たない。

本来の神戸らしさをいつまでも持ちつつけてほしいものです。

私の絵のモチーフの大半は神戸の地を選んで描いてきている。それは、そこに住み生きている、そのことから私自身の主張が始まり語っている。

海と……。

都会の真中で通勤中に山が見え、海が見える街など、どこにあるのだろうか……と

いつもそう思いつつ電車のドアにもたれかかり私の大好きな海を眺めている。

この海というもの、季節、天候、時間によって色々に変わる。これほどにまで違うものかと目をみはり、その過ぎゆく一瞬を楽しんでいる。

神戸の街並は、といえば、坂道が多く、私の住んでいる灘、一王山も昔は山であり、今では宅地になっているが、その家の前も坂道である。夜などそこから見る下界の灯りは本当にすばらしい。

「私の神戸」

石川晴久

（画家）



神戸という地に生をうけて四十年を過ぎし現在の私。

この神戸という地（街）は南北に短く、東西に長い。そして、街全体があかぬけし、シャープさがあり、「もの」が豊富にあふれている都市だと思ふ。

私は、塩屋、垂水へと、神戸の「西」の方に仕事で週何回か電車で通うが、その間（須磨あたり）北を見れば山、南を見ればどこまでもつづく



第29回新世紀展「遠い海」

くものだと思うから……。

時代が新しく変っていてもそこには私なりの神戸を見ることが出来るものと思う。そして私が描こうとするモチーフ、主張が必ず生まれ、育つものと考えている。

「私の神戸」いつまでもこの地を離れず、心の中で大切にしていきたいと思う昨今です。

月下の猫

武田信明

▲詩人▼



阪急六甲駅のすぐ南に、こもりとした森がある。八幡神社の杜である。植物にうとい私には、その名前も分らぬが、かなり広範囲にわたって、樹齢何十年とも知れぬ巨木が鬱蒼と生い茂っている。この八幡神社の鳥居の真前に、この一月まで独りで暮らしていた。神戸で生まれ育った私にとって、この期間ほど緑に囲まれて生活した事はなかった。人が眠りにつく頃合から、梢高くで「ポン、ポン」と鼓を

そつとつように鳴き始める鼻も、私には初めての経験だった。風の強い夜は、部屋に居ながらにして、樹々の葉がいつせいに裏返る様が目に浮び、眠りに落ちても、しばらくはザワザワという葉ずれの音が、波音のように耳の中に残った。

朝刊が配達される時分に床に就き、明くる昼近くに眼をさます、そんな自堕落な生活を過ごす私にとって、日中の神社より、深更の人氣のない神社により親しみを覚えるのも当然であろう。鳥居から本殿まで、百米ばかりの一本道が通っており、夕暮には両側に並んだ燈籠に灯がともされる。暗闇の中に、ほうつと、魂が浮かんでいるかのようなその幻想的な眺めが好きで、深夜わけもなく徘徊したものである。歩いてみると、あちこちから猫が姿を現わし、近づいてくる。八幡神社は猫が多いことでも有名だった。何気なく餌をやり始めて以来、心をゆるしてくれたのか、それとも非力な事を見抜いたのか、大胆な奴は、私の膝頭に

体をすりつけてくる。月夜の晩には、猫が集会をするという伝説めいた話が、決して作り事では無い事も、この目で確かめた。十数匹、いや、もっといたかもしれぬ。どこから湧いて出たかと思われるほど多くの猫が、あるものは身を横たえ、あるものは狍犬の姿勢でじっと蹲っている。それら猫の姿が、ほの白い月の光を浴びて、影絵のように浮きあがって見えるのを、ひとり輪の外にたたずんで、飽きもせずに眺めていた。およそ猫なるものとは無縁に生きてきた私が、猫にとりつかれ、とうとう一匹の猫を飼うにいたったのも、それ以来の事である。昨夏、「ロール・シャッターの猫」と題した処女詩集を上梓した。

カトト/石川晴久



舞有情

松本 尚蒔

△邦舞家▽



学生時代から、いろいろやってみて、私自分が選んだ地唄舞というのは読んで字の如く、地唄・土地の唄ということで京・大阪でもはやされた遊里の世界のなかの男女をテーマにした唄を中心に元禄年間に完成されたものが数多くあります。

作品は決してハッピーエンドでなく、ままならぬ恋に苦しむというのがほとんどのよ



上方舞特選会（国立劇場にて）

うです。それを肉体的に舞の所作のなかにどう表現するか、ハッとする感動、ギリギリの苦悩、強さ、哀しさ、もろさ、そういう女の奥深い情につながるものばかり、そこに私が魅せられる地唄舞の味があります。

当初、振りには制約があるものの性格づけや、演じ方は、思うにまかされる要素が多く、四方八方遮るもののない空間に自分を放り出されるようで、これ以上の自由がないと、悦に入り、時空軸を自在に移動できるんだとオーバーな表現をしたようです。

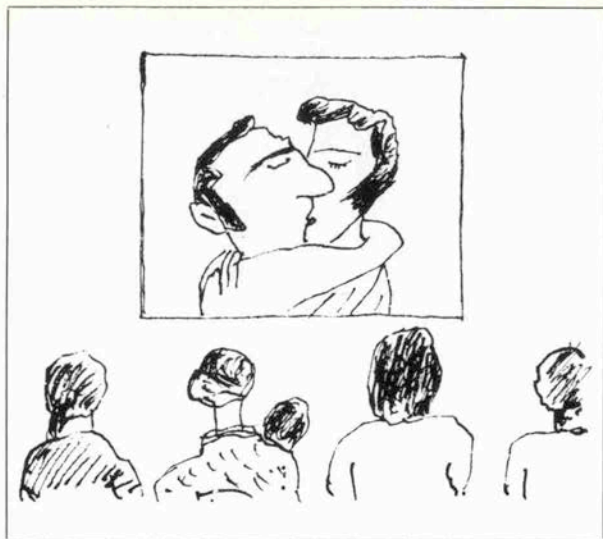
「地唄舞って、どれ見ても同じで、えらい、ゆっくりで、寝むたくなるわ」という声をよく耳にします。私も頭では「そうだわ」と納得しながら、どの曲も、人物が違っても、それぞれの心があり、道行があるのに、これは心の表現力の足りなさを反省せざるを得ません。その上、長唄、常磐舞、清元等に比べて、三味線のひき方も浄瑠璃の棹を落として、陰のこもった哀歎のあるひびきが、どれも同じ旋律に

聞えるようです。

古代の舞いは、神がかりであり、俗ばさから神聖なるものへと高めていく。現世も、最初にふれた男女の営も、神聖な表現力が必要では、と、こんなことを考えながら、先日、京都・永観堂（禪林寺）に再度、訪れました。「見返り菩薩」と「涅槃の図」は私の心境と相まって、それはまるで、愛と万物の哀しみが南北朝時代から、よみがえってくるようで、身体の中が熱くなり、まさしく私が舞のなかで求めている、発散できない抑圧の美学というのでしょうか、あるいは楚々とした自然体とも言えましょうか、全てが内包的で、手が届かないものにふれたような熱さが今もなお感じます。

今や、私が舞い、まわりながら、自分の中に潜んでいるだろうものを目ざめさせ、いにしえより通じる糸もたぐりよせ、学んでゆきたく心しています。

※まわりは踊ると舞うを分類して前者を跳躍、後者を旋回と解釈しての言葉です。



わては創刊号からたしか書かしてもろてますとおもいますがそれが300回。えらいもんでんなあ。はじめ小泉の可愛い娘はんから「書いて」とたのまれたとき神戸のしろおとはんがやれるもんかいなあとお直そう思いましたんや。

ところがそのしろおとはんのトウサンがやりますわ、総アトびかびかの本だすわ、こりやせいたくや、けどまあ一年もつか二年がとこやと踏みましてん、それがあんた、えらい人やいろんな芸術家やいろんな話題の人をどんどん誌上に集めはりまして、こりや、えらいしろおとはんやメクラ何とかにおじずで今にペチャンコやで思ったらそれがあんた、一年二年三年四年五年六年とおつきあいてますうちにホンモノになりだして、こ

■月刊神戸っ子300号記念特集

エッセイ

ほんまに、よう

やりはりましたなあ

しゆく〃〃300号〃〃



淀川 長治

〈映画評論家〉

絵／灘本 唯人

の娘はん大人しいあにさんと組みはって、くろおとや、もう、ほんまに、くろおとだんがな。

このまえ神戸の宮崎の辰ちゃんに逢ったとき、ごめんやすやでエ、この神戸の誇るべき市長どのをかくも安っぽく呼ばせてもろうたのも、もとはといえは二人は神戸の旧制三中の同じ仲間ですなあ。同窓生というもんはいつまでたっても「ようおまえ」「なんや、おまえ」てなこと言えますねん。その市長はんとたまたま話が神戸っ子の本のことになりましたん。するとこの人のりだしてからに「あんた、あの本、よろしまっしゃろ、だいいちあの本のTHE・KOBECOCOという文字がよろしますなァ、KOBEEのあとがCCOやたいがいなら、KKOとつづりますがな、こころ

あたりからしてこの本は神戸らしいねエ”だった。べたほめや。

なにかこの市長には、いかめしやいやらしさがおまへん。これが…神戸だんねん。これこそが神戸人や。

いまだき、あのすごいコイソはんの絵をずうーとかるやかに表紙につづけ、中西の勝先生の香りあふれるよその国のあの筆のあとの鮮やかさ、絵に文にこの本、そや、あの昔の、ええとこええとこしゅうらくかん、あの気ぐらいの高さを、全国のタウン誌ちゅうから抜きんでてかがやかしてはるのや。三〇〇号ようがんばりました。あの創刊のころのトウサンが今ではモダンなメガネをかけたはって、やれサンバややれ何周年記念パーティーやと、やっぱり、こりやもう神戸っ子。やりかたがぜいたくで、タルミ、アカシ、スマ、アシヤ、キタノ、ロッココ、これをぜんぶ吸いとって、三の宮で料理して東町大神ビル九階で本にしゃはるこの小泉美喜子と、あにさんの小泉康夫のこのファイトとこの神戸っ子ぶりが、ついに三〇〇回！拍手拍手また拍手。ほんまにカーテンコール十八回くらいだっせ。

ところで神戸といえは明治二十九年(一八九六)日本に初めて外国から活動写真がといたのが神戸ですがな。日本で初めての活動写真が神戸でっせ。それでもうこれは記念もんや、ということとで来年五月ころか：神戸の何やら島にええ記念塔が立つとかで、わても二年まえテレビでこれ呼びかけまして金一百万をその呼びかけスタートにきふしましたが今年中にもっときふしようなんてイタマシクも楽しんどりますように、神戸はよう

やりますわ。あの海岸通り、めりけん波止場、イギリス、フランス、アメリカ、いろんな国の旗がビルの上からハタハタハタと、風にひらめきましてなあ、海の匂いと外国の香りを、わては童児二才、三才のころから身に染めとりませうちゅうのも、やっぱり、わても神戸っ子やなあ。

ところで新開地がまた”こんなことでええのんかいや”といいだしました新開地の復活元氣一〇〇ばあせんと動きを見せはりだして、これまた嬉しいやおまへんか。わてはこの新開地で育ちましてなあ。いや、新開地の道のまんなかに捨てられたわけやあらしまへんで、幼稚園から小学校から中学校をずっとここにかよいましてなあ、西洋映画はみんなここで見せてもろて、新開地はわての学校です。そやさかいこの復活運動にはおおいに役立ちたいとおもっとります。なにやら、しかし、これの会長になれなどと注文されて、こりや、あかん、会長なんちうがらかいなア、わてがと、こりやキャンベンさせてもらいました。

ということ、神戸はあれこれとめざましいこととで。その神戸のTHE・KOBECOCO…三〇〇号：一号二号とかぞえて三〇〇回、神戸の遊び好き神戸のガンバリもん神戸のなんでもかんでも一番好き、これが生んだ”神戸っ子”三〇〇号。ようやりはりましたなあ。おめでとうはん。

横浜に移って四十七年、神戸に育って三十年。やっぱりわての全身の匂いは神戸です。今でも新神戸駅へ下りると神戸がプーンと匂います。神戸はバラケツの町、それにナンカシテケツカルなんというコトバもありまして、この神戸、そんな神戸、わて、好きや！



□月刊神戸っ子300号記念によせて

随想

「神戸っ子」は 私の パスポート

原 清

△朝日放送K.K.会長△

絵／石阪春生

神戸生まれの神戸育ちを誇りと思っている私にとって「神戸っ子」は私の大切なパスポート。そのパスポート発券番号が三〇〇号と相成ったわけだ。誠におめでたいと言うべし。誰かが話していたが、神戸のサンチカ・タウンの標示。普通なら SANCHIKA と書くべきところを SANTICA と記されているが、決してキザに感じられず、かえってしっくりと肌に合うところが神戸の特長である。同じ意味で「神戸っ子」の KOBECO も正にぴったり。いかにも異人館と南京町とポータルライナーが同居している海港都市らしいネーミングである。この雑誌、写真と読み物に工夫が見える。特に音楽、芸能、レジャー、そして味覚の世界ではミニ・コミ誌らしい楽しい記事が多い。私自身も対談や連載ものでたびたび登場させてもらった。なかでも私の若かりしころ(大正時代)活動写真ファン時代の思い出話「活動狂」の連載は、その後すっかり音信の絶えていた往年の友人たちとの友情を復活させるチャンスとなり、昔懐かしい思い出話に花が咲いた。その昔、神戸の街の名物的存在だったが今は無くなっているものに、上筒井の関西学院、神戸高商。諏訪山の動物園。加納町と元町六丁目の国鉄跨線橋。そして福原口の遊廓。そんな話も出た。

先日、宮崎神戸市長、久山関西学院長兼理事長、岡本神戸女学院長らとポートピア・ホテルで会食したとき、ポートアイランドの建設、神戸ウォーター、神戸ビーフ神戸ワインの宣伝、販売など相次ぐヒット企画の話が出たが、宮崎市長は遠慮勝ちに「いや、私には運がついてるだけです」と謙遜な言葉だった。

その帰途、暮れはじめた神戸の街の灯を背景に、黒いシルウエットの山腹にくっきり浮かび出ている市章とイカリ型の電飾に、私は思わず讃嘆の声をあげた。神戸は夜景が特に美しい街である。



□月刊神戸っ子300号記念によせて

随想

「神戸っ子」は 私の 心の支え

望月美佐

△書家△

絵／石阪春生

朝鮮(韓国)の馬山生まれの私にとって、神戸は海と山がありとてもよく似た町で「水が合う」のです。戦後、引揚げて来た娘時代は、木蓮の花が匂う北野町に住んでいました。北野の坂道を下り、三角市場、トア・ロードを走って歩き「マキシム」のお帽子を買って、おしゃれを楽しんだものです。また、母がお稽古事が好きで、私もいろんなお稽古に励みました。当時、スバルのダンス教室所へ通い、新世紀や富士、パールのダンスホールでボーイフレンドとよく踊ったもので、今、ダンスが踊れるのもその時のおかげ。その後、書の好きな主人と結婚し、私も主人と共に書を始めましたが若くして亡くなり、なんと私が書の道で生きることになったのです。

昭和三十四年に日展に初入選して十年は書の世界だけに明けくれ、昭和四十二年にNHKドラマ「みだれ髪」で、与謝野晶子に扮した渡辺美佐子さんの書の吹き替えをやり、その成功いらいマスコミ界とご縁が出来ました。「神戸っ子」との出会いもそれ以来で、「神戸っ子」を通じて、阪本勝さんや陳舜臣さん、石野証券の石野会長荒尾親成さんらと出会い「オール関西」の「関西おんな」で足立巻一さんにご紹介いただいたことは忘れられない思い出です。私が書道界からフリーになり、鳳美社を設立し、「動の書」や「くらしの書」(美佐オリジナル)など、色々と挑戦した頃、神戸の男性方の応援は嬉しく、ほんとによく育てて頂いたと感謝の念でいっぱいです。

今、「動の書」を、ヨーロッパやアメリカなどで手掛けていますが、神戸の新しい知識やモダンなリズム感を身につけたからこそ出来る冒険です。仕事は東京、作品創りは神戸。神戸での心の安らぎが支えになって、瞬間芸術の書へ集中力が生まれるのです。「神戸っ子」も私にとって「心の支え」。人間と人間との温かいふれあいをいつまでも感じる「神戸っ子」であって下さい。

□れんさいエッセイ□△6▽

そんな夕子にほれました

軒上 泊△作家▽・カット／沢田大童

香港を舞台にした長篇を書き終えた数日後、僕は村の人たちと一泊二日で湯村温泉へ出かけた。毎年二月に十軒ある隣保の者だけで旅行をしているのだが、今年は一軒に二人参加した家があったため、総勢十二人の団体になった。いつもは僕らのグループだけでローカル線を乗り継ぎ、主として日本海の手回りへ出かけるのだが、今年は定員二四〇名のお座敷列車に乗り込むことになったのだ。

お座敷列車は加古川駅から出るため、そこまでは加古川線で南へ向かわなければならぬ。社町駅から列車に乗ると、すでに西脇方面から参加している幾組かの団体が乗って来て、普段は空いている列車は満席に近い状態だった。そしてさらに、青野が原、河合西、栗生と駅が移るにつれて、同じ「湯村温泉かにすきの旅」へ参加するとおぼしき団体が次々と乗り込んで来た。僕らのメンバーも大半は五十代、六十代で、三十代は僕だけだったが、ほかの団体はもっと平均年齢が高かった。老人会のメンバーもかなり含まれていたため、加古川駅のホームへ合流した二百数十名の年齢のアーレージは、おそらく七十歳に近かったのではないかと思う。

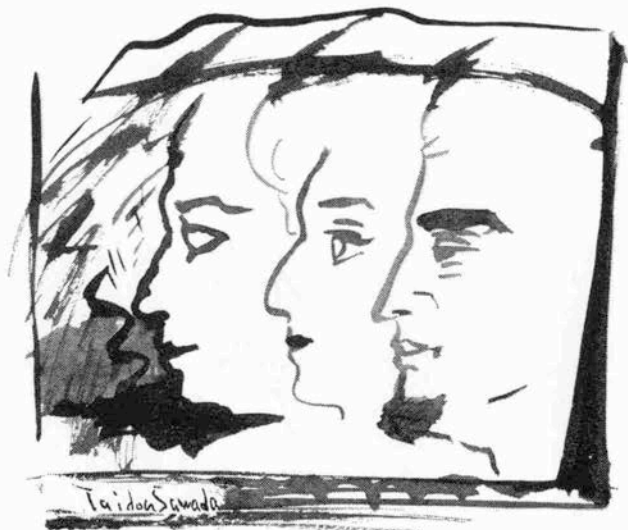
その数日前まで、僕は年末から丸二カ月近くの

間、自宅でカンヅメにされてどっぴり「香港」へつかっていた。僕の頭は明けても暮れてもキヤメロン・ロードやハート・アベニューを彷徨い続けていた。しかし、加古川駅のホームに溢れるばかりに集まった人々を眺めて、僕はこの一泊二日の旅ではぼ完璧に「香港」とおさらばできそうな気がした。ただそれだけで有意義な旅だと言えなし、そんなこととは関係なく、じつは「大都市を舞台に、リリカルな世界を、ハードボイルド・タッチで描いている作家」はこの種の旅が好きなのだ。

お座敷列車に乗り込むやいなや、さっそくレールの上を走る宴会場では、飲めや歌えのどんちゃん騒ぎが始まった。ワンカップが次々とあけられカラオケのスイッチが入られ、今年隣保長にあたっていたよっちゃんも買って来た、摘みがわりのお菓子の類がテーブル上に並べられた。隣保の中では一番酒がいけるで、ちゅんとかつよっさんは、ハイペースでワンカップを空にしていく。かおっさんとよしかずさんはマイペースでゆっくりと酒を身体の奥深く浸透させている。そして、僕ときおはんもまずまずの調子で酒をやっつけ始めたのだ。

男はその七人で、ほかの五人の女性陣はもっぱ

らジュースとお茶を飲んでいた。しかし、やまぐつ、ただだけは酒も飲んでた。この人はなかなかの女傑で、その日も普段のままの威勢の良さを車内でふりまっていた。やがてカラオケのマイクが僕らの集団へ回ってくると、てっちゃん、たしかどこかで聴いた曲だが、なんという曲だった？と悩みそうな節回しで、身体をくねらせながら、時おり両眼をつりながら、絶妙のエンタターナーぶりを発揮し始めた。それに触発されたか、続いてかつよっ、さんがマイクを握り、その内にやまぐつ、たんまでも歌い始めた。車内は、演歌と酒と哄笑のるつぽで、酒のサカナは世間話と車窓を流れる一面の雪景色だ。



もちろん、僕も飲んだ。食べた。歌った。そして笑い、大いに喋り、片道五時間の車内で、ほんの一、二度、雪でおおわれた山あいの景色へ作家の眼差を投げていたのだった。

「良くん、どないや、こんなん、ええ小説にならんこお」

向かいに坐っていたときおはんが酔った勢いで尋ねてきた。ときおはんに限らず、隣保の人が「小説」という言葉を僕に投げかけたのは初めてだった。そんなところが僕は気に入っていたし、こんな時に突然出てきた「小説」という言葉の響きもとてもよかった。

僕は笑いながら答えた。

「あほか。こんなもん、小説になるかい。わざわざ小説にせんでも、このままでけっこうおもしろいやろが」

「そうか。あかんか」

ときおはんは笑いながらそう言い、ワンカップのふたをあけて身体ん中へ酒を注ぎ込んだ。

「良くん、お前、歌えや」

てっちゃんがマイクを渡しながら言った。

「よっしゃ、歌うわ」

僕は歌詞カードをめくりながら答えた。

「これや。これを歌たろ」

僕はそのページをあけたまま添乗員へ向かって叫んだ。

「そんな夕子にほれました」

「ええ？ なんですか？」

添乗員が大声で尋ねた。

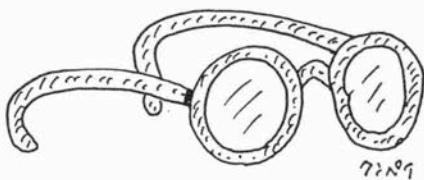
今度は僕はマイクを通して叫んだ。

「ええか？ あのな。そんな夕子にほれました！」

こうべ・きろん

随想

父・神戸



7:29

絵と文

東 君平

しんぶん ふんでも

しかるのに

えほん ふんでも

しかるのに

おもちゃ ふんでも

しかるのに

ぼくがメガネをふんだとき

とうさん なんにもいわないで

すこししてから ぼくをみて

「いたくないか」って

いったんだ

あのと き ほんとに

ごめんさい。

私の父は船医をしていた。

「神戸の水は世界一おいしい」

戦争が始まった頃、こう言って船をおりて神戸で開業医になった。私は父の晩年の子だったの

で、十三才で別れがくるまで、ほんの短い間しか一緒に暮すことがなかった。

私が生まれた場所は、新神戸駅と三宮のちょうど中間あたりの加納町だった。当時は、その辺りのことを葺合区といっていたが、現在は字に書きたくないような区名になっている。葺合という地名のどこが気に入らなくて変更してしまったのか、残念でならない。勿論、三十三年前にあの世へ行ってしまった父が、そのことを知っても私と同じように残念に思うと思う。

その加納町というか、そこは市電通りで、実は私の家の地名は二宮町といった。私はこの二宮町のかかなり大きな家で戦火を浴びて焼け落ちるまで育った。

あの日は、気がつくとき次兄と二人して家の横を流れる溝にしゃがんでいた。私たちの股の下にはわずかな水が流れていて、時々火のついた木片が通り過ぎた。頭の上で姉が私たちを呼んでいた。

「早く逃げな、あかんよ」

たぶん、このあたりの言葉で私と兄を溝から引き上げてくれたのだと思う。

その日は、ちょうど昼前だったらしく、大きな釜に米をいっぱい研いで、あとは薪に火を点けるだけになっていたらしい。

「あっ。おいしそうに炊けてるわ」

大きな家が一軒丸焼けになった後、木蓋の焼け落ちた釜の中をのぞいて、姉と母は顔を見合わせたと聞いた。びっくりするような、台所番の女たちだと思ってしまう。

十三才の春、昭和でいうと二十七年だった。父が遠く伊豆へ旅立つという。小さな包みを一つ私がつけて神戸駅まで見送って行った。その頃の、私の家は湊川神社のすぐ近くに小さいながらも、すぐ目の前が裁判所で、留置所の高くて薄ぎたない塀も見えた。風がつめたくて、小学生の私の目には多少つらかった。自然に涙が出てしまつて、学童服の袖で拭いたのを憶えている。

父が乗った汽車は神戸駅始発東京行の鈍行列車だった。私の家から神戸駅までは、高齢の父と小学生的私の足で十分足らずだった。曜日のせいか昼間だったせいも、今ではその日の事情はわからないが、車内はガラガラで父一人だったようにも思える。私はホームに立って汽車が発つのをじっと待っていた。すると木枠の窓を父が開いて私を呼んだ。

「きみは、一緒に行かんのか」

私が窓に近づくと父はそう言った。

「ハイ。学校がありますから」

私は、本当にそうだったから正直に答えた。

「そうか」

父はそう言つて窓を閉めた。

それからは又、私はホームに立って汽車の発つのを待った。ホームが寒かったのかどうだったのか憶えていない。しばらくして、又、父が窓を開けて私を自分の方へ呼んだ。

「うっかりして、キセルを家に忘れたよ」

父はタバコの好きな人だった。

「わるいが、取ってきてくれんか」

私は駅の階段を駆けおりて、つめたい風の中を涙を流しながら、それをまた袖で拭いながら走つた。勿論悲しくて涙が出るのではなくて、つめたい風に目の表面が耐えられないからだ。結局、家のどこを素早く見渡しても、父のキセルは見あたらなかった。

そして、戻つた神戸駅のホームにも、父を乗せた汽車も見あたらなかった。

「それっきりですよ」

私は近頃、親しい誰かにこの話しをする時、恥かしながらほんの少し涙ぐむ。

父とはその日限りになつてしまった。

東京生活をもう三十年近くもしてしまつた。最近の仕事など抜きで神戸や大阪に出掛けることが多くなつた。東京東京仕事事で夢中になつていて神戸を置き去りにしていた年月はもうどうにもならないけれど、やはり神戸だと最近思う。

「何がや」

こう訊かれると答えられない。

「けれども、頭の中が、やはり神戸だなんだよね」

こんな神戸っ子が、東京にいることを誌面を利用していただいて、お知り頂きたかつた。

神戸に住んで半世紀 私の音楽生活

市来崎のり子

(大阪教育大学名誉教授)



「神戸」といえば、私はまっさきに、すみきった青空に映える緑の山々、青い海を眺めて東西にひろがるすがすがしい街並みが目にうかびます。それぞれに四季折々の豊かな表情があって、美しくつろろ自然の姿は昔と少しも変わらずに大らかな天の懐にも似て、疲れた神経や悲しい心をやさしくつつみやしてくれます。こんな神戸が私は大好きです。きれいに手入れされた北野町界限、浜辺に近い灘の酒蔵、海にのびておとぎの国を思わすポートアイランド……どれもこれもが、ついそこにある自然と共に、神戸を訪れる人々に語りかけるのです。ポートアイランドはポートライナーで一周するのが一番快適で、さらさら輝やく太陽のまぶしさをうけて次々建ち並ぶ高層ビルやその間を走る舗装された道すべてが超近代的、それでも荒れた日には海の風をまともにうけたフェニックスや大きい樹木は今にもなぎたおされそう、ハラハラいたします。港は外国船や沢山の様様な船で賑わいなにもかも明るくて一緒に揃ってしまおうのです。

その昔、私が神戸に移り住んでから、かれこれ半世紀余りがたちました。父の転勤のために小学生の私は四回も転校し、最後に離宮道の須磨小学校五年生、秋も終りの頃でした。小さい頃から歌

う事が大好きな私は転校の都度「学芸会」でいつも独唱させられたものです。「大きくなったら音楽家（声楽家）になるのよ」なんて何もわからないで大きな夢を持っておりました。この事は武士気質の父にとっては何より苦々しく（にがた）一番気にいらぬ事だったようです。私の夢の実現を助長するような蓄音機やオルガン、ピアノなど一切買ってもらえませんでした。が、六年生になったある日、母から「県一（旧兵庫県立第一神戸高等女学校、現神戸高等学校）にはいたらピアノを買ってあげますよ」といわれ、我れと我が耳を疑う思いで、それからというものは一心不乱つめこみがり勉の結果、めでたく県一に合格、ごほうびのピアノを買ってもらえた嬉しさは今もって忘れる事が出来ません。

この事は県一四年終了で東京音楽学校（現東京芸術大学）に入学出来るきっかけともなり、昭和八年から同十四年研究科修了までヘルマン・ヴィーハーペーニツヒ先生（ドイツ宮廷歌手）に師事出来て歌に明け暮れた東京の六年間は瞬く間にすぎたてしまいました。その間、昭和十二年本科卒業の春には日比谷公会堂で読売新人演奏会に母校代表で出演致し歌劇「オルフォイス」のアリアを歌いデビューしたのもついこの間の事のように思えて

なりません。翌十三年（研究科二年）秋の定期演奏会では同じく日比谷公会堂で日本初演、モーツァルト「レクイエム」（大合唱とオーケストラ付）のアルトソロの光栄に浴しました。その頃の日本は二・二六事件以来、拍車をかけて情勢は悪化、遂に世界大戦に突入してゆきました。

昭和十二年秋に父が病没し、翌十三年大学卒業の兄はすぐに召集されてソ満国境の警備につきました。今日の現代とはちがいが親元を遠く離れて若い娘がこれ以上東京で独り住いをするにはあまりにも時代が悪く、母の猛反対と切望もあって、母校に残るお話さえも、あきらめて暗涙にむせびながら東京をあとにいたしました。私の運命は一転してしまいました。私は昭和十二年夏休みにNH



関西オペラ「カルメン」を演ずる筆者（中央）＜昭和38年5月＞

K（BK）からドイツ歌曲やアリアなど原語で初放送いたしました。が、同十四年に帰神した時には世の中はもう外国語での演奏や放送は禁止されていて日本語の訳詩か国民歌謡的なものを中心になっておりました。たしかその頃、竹中郁先生作詩の「かえり路のうた」をマンドリン合奏の伴奏で放送いたしました。が、私は六年間もドイツ人の先生でドイツ語の歌曲ばかり歌っておりましたので自分の国の言葉なのに日本語は何て歌いにくいんだろうと思ったその時の事が強く印象に残っております。そのおかげで山田耕柞先生の歌曲をはじめ、他の日本の作曲家方のいろいろ沢山な曲を勉強させて頂きました。

戦争は益々激しくなり、空襲警報の時代がつづきそのうちに空襲も度かさなって留守が出来なくなり、私はついに演奏も放送もやめてしまいました。最後に歌った「大和おみな歌」の録音（その頃はレコード盤のようなものに入れた由）は終戦直前まで毎日のようにかけられて盤がすりへり、ガリガリになるまで歌が流されたとか。戦後もだいたい経ってから局の方から伺いました。あらためて激しかった戦争の苦しみ、長かった惨めな時代を思いあわせずにはいられません。省みますに、時代の激流や歴史の怒濤は個人の意志など全く無視して、音楽や文化、教育など一切を、何の容赦もなく一気に押し流してしまうものと、しみじみ痛感いたしました。世界のあちこちに不穏な雲行きがいつも感じられる昨今、現代の若人のほとぼしる情熱とみなぎる力で、永遠に世界平和と安泰を、つなぎとめてほしいものと心から希ってやみません。



幸せの門出に
気品の花嫁……

桂由美ブライダルコレクション入荷中

花嫁の衣裳、ヘアー、メイクを
トータルでお作りします



美容室 **エリザベス**

本店 / 神戸市中央区三宮町2丁目6-4(三上ビル)
TEL (078) 331-8894・4917

お貸衣裳 花嫁衣裳サロン

東京・遠藤波津子直流 関西唯一人者 如尾美久子の店

一本店と同じ(三上ビル)一 神戸市中央区三宮町2丁目6-4
TEL (078) 331-3258

—美しさには理由があります。—

①②

ここ一番の美しさ
春のフォーマルウェア。

フォーマルは一年のうちほとんどがタン
スの中。それだけにシミや虫くいが発生
しやすくなります。一度袖を通しただけ
のものでも必ずクリーニングを。



SINCE 1933



本社 / 神戸市灘区記田町1丁目2-16
078-851-2440

■大阪支社 / 06-653-1332 ■つかし人店 / 06-420-3754 ■ロブ・ニジマ / 078-332-2440
■山手店 / 078-221-2440 ■宝塚店 / 0797-72-0810 ■リフォーム・フルフル / 078-221-9110

△その76▽

ちっぽけだが新しい
個人美術館の楽しみ

—熊谷守一美術館そして長谷川美術館—

嶋田勝次

△神戸大学建築学科助教授▽

東京へ出掛けた時に時間があれ

ば、帰神前のひとときを東京駅近くの美術館で、ほっとした時をもつことが楽しみとなっていた。ブリジストン・山種・国立近代などの美術館から彫刻センターその他のいっぱいギャラリーがその時その時の自分だけの空間であった。

最近はもう少し足を伸ばして、

私鉄沿線の個人のちっぽけな美術館を探す楽しみがふえて来た。

先月は、開館して間もない熊谷守一美術館をやっと見つけて、よ

いひとときをもった。

西武池袋線椎名町駅から徒歩十分、おちついた住宅地の中につつましやかに立っている新築の鉄筋コンクリート打ち放しの三階建てである。一階が美術館と喫茶室、二階が娘さんの展示室と私室、三階が娘さんの友人の建築家の事務所となっている。

熊谷守一は明治十三年生まれ、

昭和五十二年九十七才で没するまで画業に専念し、画仙といわれる程独自の歩みや作風にはいつも気になっていた画家であった。

当美術館には、守一の油絵・墨絵・書・クレパス画・その他を含めて約五十点が収蔵されているのだが、常時十六点の油絵を中心に展示されている。初期のアカデミックなものからフオーブなタッチから抽象的なものに収斂して行った過程が、ここでは想像出来る。

これまで守一は頑固なまでに単純な形に終始一貫して来たものと思っていたが、やはりそこに到達する長い道程があったことが分る。

そしてもの存在をずっと追求して来た自信が、児童画的なものにまで昇華して来ている。

守一がよく画く題材は、木・小

鳥・猫・虫など、みんなに親しまれている身近かなものが多い。それぞれ絵ににじみ出ている人間の純朴さに裏打ちされた直截的表現は、年を感じさせない明るさにあふれているが、この一階の部屋の奥の隅におかれた守一愛用の画架にある晩年の絵「夕暮れ」の簡潔な姿だけでもみごとな深味を出している。

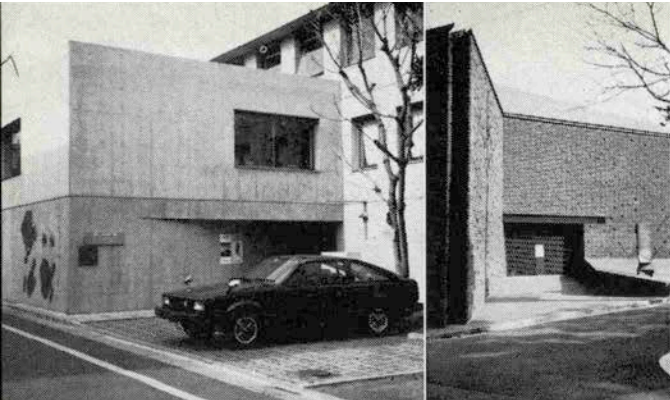
都市の住宅地の冷やかな環境が、この小さな美術館の存在によって、地域の暖かいコミュニティスポーツとなることが期待されるが、また建物の外壁につけられた蟻や蜂のレリーフは、まちのユニークなシンボルデザインにもなっているように思われる。

この帰途のついでに立ち寄った長谷川美術館は、東急新玉川線の桜新町の商店街を少しはずれたところ、桜並木のある住宅地にあった。

漫画「サザエさん」の作者長谷川町子さんとそのお姉さんの美術コレクションを展示する美術館だが、煉瓦タイルの外壁のトンがった建築形態が、まちなみにあらたなイメージを加えて来ている。

最近の建築雑誌で紹介されていたので、建築そのものの面白さにも興味深かったが、二月いっばいは休館で内部を拝見出来ず残念であった。

しかしこれからも小さな美術館を訪ねる都市探険の楽しみをもち続けようと思っているのである。



熊谷守一美術館外観(左)と長谷川美術館入口